

# 「透明なコミュニケーション」をこえて

門 部 昌 志

Beyond “transparent communication”

Masashi MOMBE

**Abstract:** This paper attempts to assess Stuart Hall’s encoding / decoding model which emerged from his famous article titled “Encoding / decoding”. This model has been both valued and criticized by researchers such as D. Morley and J. W. Lewis. In particular, they noticed that his model resembled traditional models of communication. However, Hall himself responded to their criticisms in an interview on his encoding / decoding model. In this paper, we will consider these criticisms as well as the response by the author. In addition, following P. Pillai and J. D. Slack, this article discusses that there is a tension between the reliance on the earlier models and an articulated model of communication, and furthermore, it states that the latter can overcome several limitations of the encoding / decoding model.

ステュアート・ホール (S. Hall) の論考, 「エンコーディング／ディコーディング」は頻繁に言及されてきた<sup>1</sup>。メディア研究ないし文化研究に関心をもつ者で, この論文を知らない者は皆無といっても間違いではないであろう。しかし, だからといって, もはや仔細に検討する必要のないものとして片付けてしまってよいのだろうか。1990年代の後半以降の日本において「カルチュラル・スタディーズ」の流行とともに文献は飛躍的に増大した。それに伴い, エンコーディング／ディコーディング・モデルに言及した邦語文献も散見されるようになった。だが, 日本において, このモデルの可能性が汲み尽くされ, あるいはその限界が徹底的に論じられたといえるであろうか。また, 論文が発表されて30年以上が経過している。その過程で, このモデルをめぐるコンテキストは変化した。

エンコーディング／ディコーディング・モデルは, 1973年, レスター大学のマス・コミュニケーション研究センターにおけるコロキウムでの発表で提示され, 1980年に論文集に収録されて広範な影響を与えた。1990年になると, 能動的受け手研究を「修正主義」とする問題提起がなされ (Curran 1990), モーリーとの間で論争が展開された。能動的受け手論の成立においてホールのディコーディング概念は重要性をもっているのだが, しかし, ホールの議論は, 受け手の被拘束的な側面をも考慮したものである。こうした文脈から, ホールのモデルを再評価する新たな読解が生み出されてもいる (Morley 1994)。さらに, 1990年代以降, ホールの名前をタイトルとした論文集等が刊行されており (Morley and Chen 1996)<sup>2</sup>, 2003年から2004年にかけては, ホール論の刊行が相次いだ<sup>3</sup>。彼の言説が総体として検討される段階に入ったのであろう<sup>4</sup>。

本稿は、ホールのモデルを考察するささやかな試みである。それが広範な影響力をもつ以上、本稿の試みは必然的に部分的なものとならざるをえない。近年では、コードから発話への転換を提案する論考が書かれているが(Billig, 1997)、本稿では、それらに先立つ議論を主な対象とする。以下では、英米において、透明なコミュニケーションという観点から、この論文がいかに読まれてきたのかを検討する。ここで、全体の流れを説明しておく。

まず、部分的にはよく知られたものであるが、オーディエンス研究による批判がある。1970年代、D.モーリーはホールの理論的モデルを応用して経験的調査を行い、メディアの受容に関するホールの仮説を裏付けた。しかし、1981年になると、彼は『『ネーションワイド』・オーディエンス：批判的後書き』を公表し、このモデルの限界やアポリアを示した<sup>5</sup>。

次に、学術雑誌に掲載された論考がある。1983年、J.W.リュイス(J.W.Lewis)による「エンコーディング／デコーディング・モデル：デコーディング調査のための批判と再建」が『メディア、文化、社会』誌上で発表される。この論文では主に記号的な観点から多数の批判がなされているが、その一つの論点は、ホールの論文において透明なコミュニケーションという図式が温存されているというものであった。モーリーもまた、従来のコミュニケーション・モデルとの類似性を指摘していた。

これらの問題提起をうけて、ホール自身はどのように考えたのか。その手がかりは、1989年に行われたホールのインタビューである。ここでは、モーリーおよびリュイスの提示した問題も論じられるほか、ホールの修正案等が記されている<sup>6</sup>。インタビュアーの一人は、ホールのモデルを論じたリュイスである。このインタビューが、リュイスらの編著『視聴、読書、聴取』に収録されたことも留意すべきである(Lewis, 1994)。

このインタビューと同じ年、ある国際会議でホールのモデルについて発表したのが、P.ピラーイー(P. Pillai)である。その後、1992年に発表した論文で彼女は、節合の理論から再読することにより、エンコーディング／デコーディング・モデルの限界を乗り越えられると主張する(Pillai, 1992)。

1996年には、著名な論文集『スチュアート・ホール 文化研究における批判的対話』が刊行された。そこには節合の理論と方法に関する、スラックの論考が収録されており、エンコーディング／デコーディング・モデルが論じられている(Slack, 1996)。つまり、ピラーイーの後、スラックの論考によっても、エンコーディング／デコーディング・モデルにおける節合理論の重要性が論じられたことになる。比較的入手しやすい論文集に収められたスラックの論考だけを読むよりは、それに先立つ、モーリー、リュイス、ピラーイーの論考をふまえることで節合理論の重要性をより深く理解できるものと思われる。

以下、本稿の第一章では、ホールのエンコーディング／デコーディング・モデルの概略を確認する。第二章では、このモデルを応用した、モーリーのネーションワイドの聴衆に関する研究とホール批判の詳細を検討する。第三章では、リュイスの提示した論点を確認し、これらの批判に関するホールの返答を検討する。第四章では、ピラーイーとスラックの論考を参照し、節合理論によっていかなる再読が可能であるかを検討する。

## 1. エンコーディング／デコーディング論文

送り手／メッセージ／受け手の図式は、マス・コミュニケーション研究ではおなじみのものである。これに対し、エンコーディング／デコーディング論文の冒頭では、生産、流通、分配／消費、再生産の過程からなる商品生産モデルの応用が提案される(Hall, 1980: 128)。ただし、

マス・メディアの場合、生産されるのは物ではなく言説である。応用された商品生産モデルに関連するのは、生産が消費を規定するのみならず、消費が生産を規定するという弁証法的思考である。この他、重層的決定や相対的自律性の概念も背景にある。経済的要因は唯一の規定的要因ではない。経済的なものは最終審級における決定を行うとはいえ、決定要因は重層的である。また、ある契機は、節合された次の契機を完全に決定することはない。

ホールは、コミュニケーションにおける円環の各契機を記号的な術語で言い換える。番組制作過程としてのエンコーディング、意味ある言説としての番組、そして視聴者による受容過程としてのデコーディングがそれである。以下、この枠組みにそって説明する。

番組制作過程としてのエンコーディングは、意味づけの過程である。歴史的出来事は、そのままの形態では、ニュース番組で伝達されない。コミュニケーション可能な出来事になる前に、出来事は「ストーリー」にならねばならない。出来事がテレビ的言説の音声的・視覚的形態に変換される際、意味に関する形式的なルールに従ってなされる。

番組制作には、放送の制度的構造、実践、制作のネットワーク、組織化された関係や「技術的基盤」が必要である。番組制作は、言説の様式における「労働過程」であり、その背後には生産関係がある。制作においてメッセージが構築される時、循環的過程が始まる。この制作の過程それ自体も言説的な側面があり、意味とアイデアによって枠づけられている。たとえば、制作のルーティン・ワークで用いられる知識、歴史的に規定された技術的なスキル、職業的イデオロギー、制度的知識、定義や仮定、さらには、オーディエンスにかんする仮定などが、この生産構造を通して番組構成を枠にはめる (Hall, 1980: 129)。

エンコードされたメッセージは、ある時点で、視聴者に譲り渡される。しかし、メッセージが効果を及ぼすのは、視聴者がデコーディングを行い、意味ある言説として奪用した後である。デコーディングされた意味のセットが、知覚的、感情的、イデオロギー的ないしは行動的な帰結をともしないながら影響を及ぼしたり、楽しませたり、教化したり、説得したりするのである<sup>7</sup>。

ただし、エンコーディングにおける意味構造とデコーディングにおける意味構造は、同じものとはかぎらない。この対称性の度合いは、コミュニケーション的交換における「理解」と「誤解」の度合いである。歪みや誤解が生じる背景は、制作者と視聴者の位置の構造的な相違、番組制作における言説への変換と視聴者による言説からの変換の際に採用されるコードが異なることなどである (Hall, 1980: 131)。

コードは、特定の言語共同体にひろく共有されており、早期から獲得される。ゆえに、それは構築されたものではなく、自然な所与としてあらわれる。コードは「自然な」認識を作り出す一方、コード化という実践を隠蔽するイデオロギー的効果をもつ (Hall, 1980: 132)。

イデオロギーを論じる際、ホールは「逐語的な」意味としてのデノテーションと、より連想的な意味としてのコノテーションという区別を導入する。両者の側面は、実際には、絡み合っているが、この区別は分析的な価値から用いられる。状況的なイデオロギーが意味作用をかえるのは、特にコノテーションのレベルである。ここで、記号は新しいアクセントに開かれており、意味をめぐる闘争に参入する。だが、デノテーションがイデオロギーの外部にあるわけではない。「自然」に感じられるほど、イデオロギー的価値が強力に固定されているともいえるからである。したがって、デノテーション／コノテーションという術語は、各々、言語におけるイデオロギーの存在／不在に対応するわけではない。それらの術語は、イデオロギーと言説が交差する異なるレベルを区別するための言葉である (Hall, 1980: 133)。

デノテーションのレベルにおいてテレビ的記号は、極めて複雑なコードによって固定されている。他方、コノテーションのレベルでは、束縛されているとはいえ、記号はより開かれており、

ポリセミックな価値を活用できる。他方、意味作用への束縛もある。閉鎖の程度は様々であるが、いかなる社会／文化も、社会的、文化的、政治的な世界の分類を押し付ける傾向にある。私たちの予想をこえるような新しい出来事、問題含みの困難な出来事は、それらが「意味をなす」と言われる前に、言説的な領域を割り当てられなければならない。それらをマッピングするもっとも共通のやり方は、新しい出来事にある領域をわりあてたり、既存の「社会的現実の地図」をわりあてたりすることである。一つの出来事をマッピングする際、一つ以上の仕方で秩序付け、分類し、割当て、ディコードすることが可能であるが、しかし「優先的な読解」のパターンも存在している。このように、ホールの立場は、読みの多様性と束縛の双方を認めるアンビヴァレントなものであり、それゆえ、彼は「決定的 (determined)」ではなく「支配的 (dominant)」という術語を用いるのである (Hall, 1980: 134)。

知られるように、論文の後半では、視聴者がテレビ言説を解読する際の仮説的な位置について述べられている。これらの位置は、経験的に検証され、洗練される必要があるとホール自身が述べていることは留意すべき点である。

第一の仮説的な位置は、支配的でヘゲモニックな位置である。ここで、エンコーディングの際に用いられたコードの観点から、視聴者がメッセージをディコーディングする場合を考えて見よう。この場合、視聴者は支配的コードの内部で作業しているのであり、ホールは、これを完全に透明なコミュニケーションの理念型的な事例だと述べる。

この支配的コードに関連するものに、職業的コードがある。この言葉は、ヴィジュアルの質やニュース・ヴァリュー、プレゼンテーション的価値、テレビ的な質、プロフェッショナリズムなどを強調する。出来事やフォーマットの選択、職員の選択、イメージの選択、ディベートの演出などは、職業的コードの作用によって選択され結合される。技術的、実践的な事柄について独自の尺度をもち、変更をおこなう点において、職業的コードは支配的なコードから相対的に独立している。他方、それは支配的コードのヘゲモニー内部で作用するとも述べられている (Hall, 1980: 136)。

第二は、折衝的コードないし位置である。折衝的なディコーディングは、適応的要素と対抗的要素の双方をふくんでいる。それはヘゲモニックな定義の合法性を認めるのであるが、他方、より限定された状況的なレベルにおいて自らの基礎的なルールを作りだすこともある。ローカルな状況や自己の位置へのより折衝的な適用をする権利を保持しながら、出来事の支配的定義<sup>8</sup>に特権化された位置を与えるのである (Hall, 1980: 137)。

第三は、対抗的位置である。ここで、言説の文字通りの意味と暗示的な意味の双方を理解する視聴者がおり、彼／彼女がそのメッセージを全く逆の仕方で解読する場合を想像してみよう。この場合、視聴者は、ある対抗的な準拠枠の内部でメッセージを再全体化するために、優先的コードにおけるメッセージを脱全体化する (Hall, 1980: 138)。

このように、ホールは、三つの仮説的なディコーディングの位置を提示した。これは単に、視聴者による受容をパターン化したのではない。折衝的読解や対抗的読解が意味するのは、ディコーディングが必然的にエンコーディングから生じるわけではなく、コミュニケーションの円環の諸契機が必然的に相互に対応するわけではないということである。

## 2. 『ネーションワイド・オーディエンス』と批判的後書き

BBCの「ネーションワイド」は、1970年代において、夕方6時から7時まで放映された日常生活に密着した番組である。D. モーリーは、ビデオ録画したこの番組の映像<sup>9</sup>を人々に見せ、

コメントを求めた<sup>10</sup>。調査における関心の中心は、テキスト形式で提示された素材（言葉、イメージ）からオーディエンスが意味をつくり出す際の相互作用にあった。ネーションワイドの調査に関して、モーリーは二つの関心があったと述べている。第一は、記号のテキスト的組織の形式を通じて産出される意味にたいする規定性であり、第二は、社会的／構造的な変数—年齢、性別、人種、階級—の有効性からうみだされる意味の規定性である(Morley, 1992: 119)。プロジェクトは、これらの二つの次元が交差するような仕方でもディコーディング過程を研究するために計画された。その際、モーリーは、ホールによるディコーディングの仮説的位置（支配的／折衝的／対抗的）の類型を用いて、異なる社会集団によるコメントを分類している。ただし、調査の結論部分においては、社会階級の位置とディコーディングの枠組みに直接的関係を求めるものではないとされている。

本稿の文脈で重要なのは、1981年に発表した『「ネーションワイド」・オーディエンス：批判的後書き』において、自らが依拠したホールのモデルをモーリーが批判したことである。問題点は、コミュニケーションの円環の各契機—エンコーディング、装置としてのテレビを介したコミュニケーション、ディコーディング—について提示されている。

第一に、モーリーは、エンコーディング分析の焦点が、テキストの特性を検討することから、メッセージの送り手や作者の主観的意図を復元する試みへと知らず知らずの間に陥ってしまう可能性を指摘する(Morley, 1992: 120)。これに対して強調されるのは、意図と活動は、意識されざるイデオロギイ的实践によって枠づけられるということである（ただし、エンコーディング／ディコーディング論文において、不注意や無意識によってイデオロギイ的な再生産が生じる点にホールが注意を喚起していたことを忘却すべきではない）。

第二の点は、意味伝達としてのコミュニケーション、あるいはメッセージの運搬装置としてのテレビ概念が暗黙の前提とされているというものである。エンコーディング／ディコーディング・メタファーは、はじめに頭の中で形成され、次に、伝達のためにエンコーディングされるというメッセージの概念を含意すると理解される限りにおいて、不幸にも従来のコミュニケーション・モデルに近い。このモデルの背後にあるのは、意識を形成するメディアとしての言語というよりむしろ、メッセージを伝達する道具としての言語という概念である(Morley, 1992: 121)。

第三は、ディコーディング概念の広さと曖昧さという問題である。ディコーディング概念は、分離して説明すべき過程を曖昧にするかもしれない。それはテキストの読解という一つの行為を示唆しているが、実は、ここには、集中、関連性の認識、理解、解釈、反応という、ひとまとまりの諸過程が含まれており、これら全てが画面の前の視聴者に関連している。また、支配的／折衝的／対抗的という分類からなるホールのモデルが、記号から生み出された命題的意味への同意／非同意という軸に光をあてる一方、記号それ自体の理解／無理解という軸を曖昧にしてしまう点も指摘されている(Morley, 1992: 121)。

第四は、「優先的読み取り」に関する諸問題である。まず、モーリーによると、「優先的読み取り」の概念が最も適用しやすいのは、世界に関する事実に陳述を行うテキストである<sup>11</sup>。次に、彼は、「優先的読み取り」はテキストの特性なのか、あるいは読み手ないし分析者に帰すべきなのかという根本的な問いを提出する。「優先的読み取り」は、特定の手続きをへたのちにテキストから生じうる何かであるのか。それは、多くのオーディエンスがテキストから生み出すであろうと分析者の予測する読解であるのだろうか。「優先的読み取り」はテキストの特性であるのか、オーディエンスや分析者の特性であるのか(Morley, 1992: 122)。さらに、「優先的意味」における意味のレベルについての指摘もある。例えば、ニュースの記事で黒人／若者／街頭／犯罪などの言葉を関連づけることは、各言葉のもつ潜在的な意味を限定することになる。記号やイメー

ジの連辞的關係の構成は、各記号の潜在的な意味を限定するが、多義性が限定されるこのレベルは、「優先的読み取り」の定式では、無視されているという(Morley, 1992: 123)。

このように、ネーションワイド調査においてモーリーは、ホールが仮説として提示したディコーディングの類型を経験的に裏付けたのであるが、彼は同時に、そこから様々な問題点を摘出していたのである。

### 3. リュイスによる批判とホールの返答

1983年には、J.W.リュイスの論考「エンコーディング／ディコーディング・モデル：ディコーディング調査のための批判と再建」が『メディア、文化、社会』誌上に掲載される(Lewis, 1983)。これはモーリーの問題提起を踏まえたものであるが、リュイスの場合は、特にエンコーディングについて詳細な指摘を行った点が特徴的である。

リュイスは、一般的意味作用／意味付与实践としてのエンコーディングという区別を明確化する。これはホールの論文では明示的に論じられていなかった点である。「閉鎖の程度は様々であるが、いかなる社会／文化も、社会的、文化的、政治的な世界の分類を押し付ける傾向にある。一義的なものでも、異論の余地のないものでもないが、これらが支配的な文化秩序の一部となる。……社会的生活の異なる領域は、支配的あるいは優先的な意味へと階層的に組織化された言説の領域へと描きだされるように思われる」(Hall, 1980: 134)。リュイスによると、この記述は、一般的な意味作用に関するものと看做しうる。これに対して、社会的、文化的世界と折衝し、意味ある言説としての番組を制作する過程は、意味付与实践としてのエンコーディングと考えられる。

この区別が成立するのであれば、「優先的意味」も二つのレベルを想定せねばならない。すなわち、一般的な意味作用に対応する第一のレベルの優先的意味、そしてエンコーディングの意味付与实践によって産出される第二のレベルである(Lewis, 1983: 180)。リュイスによれば、エンコーディングの過程は「すでに構成された記号の体系」-優先的意味の第一のレベル-にもとづく二次的な意味付与实践の過程である。そしてテレビのメッセージは、意味を生み出すのではなく、単に意味を再生するものとみなされる。このような仕方ではホールのモデルを整理した上で、リュイスは数々の問題を指摘する。

第一に、テレビのメッセージに優先的意味が刻み込まれるという発想に関する問題である。リュイスによれば、意味は言葉や対象にもたらされるのであって、それらのなかに刻まれてはいない。さらに、メッセージに刻印された優先的意味という観念は、記号を構成する主観の存在を否定するものである。社会は、特定の意味を強めるような仕方では構造化されているのだとしても、既に作られた記号を社会が主体に提示するわけではない(Lewis, 1983: 181)。

第二は、職業的コードに関わる問題である。ここでは、まず、ホールの議論を振り返っておきたい。一章で述べたように、職業的コードとは、ヴィジュアルの質やニュース・ヴァリューなどに関わるものであった。例えば、北アイルランドの政治、労使関係法案のヘゲモニックな解釈は、おもに、政治的、軍事的エリートによって生みだされるが、出来事やイメージの選択、ディベートの演出などは、職業的コードによって選択され結合される。つまり、番組制作は、技術的、実践的な点について独自の尺度があるため、支配的コードから相対的に自律している。他方、それは支配的コードのヘゲモニー内部で作用し、支配的イデオロギーの再生産に寄与することもある。放送それ自体が、イデオロギー装置として制度的位置をもっているだけでなく、アクセスの構造によっても、職業人たちは定義するエリートと結びついている。このようなホールの議論に対

して、リュイスは、エンコーディングする者とエリートの関係、エンコーディングと他の意味作用の実践に対する関係が明確ではないと述べる。リュイスは、また、支配的意味が、作者の社会経済的位置に関連して理解されるべきであるのかという問いを提示する（この点は、節合理論を論じる際に検討する）。

第三は、コミュニケーション・モデルに関わる問題点である。支配的な意味が構築される文化的過程の全領域について、ホールは抽象的にしか説明しなかった。これはモーリーの指摘である。リュイスは、それに加えて、文化的過程の領域からエンコーディングが潜在的に排除されていると指摘する。ホールにおいて、テレビは、意味を生み出すというよりむしろ、再生する（reproducing）ものと看做されているというのである。このことは、テレビのメッセージを単なる社会的現実の表象ないし誤表象と看做す伝統的コミュニケーション・モデルと同様の構造的な位置を、テレビに与えることを意味する。たとえ、エンコーディング／ディコーディング・モデルの様々なバージョンの多くが、このようなTV概念を越えようとしているとしても、二つのレベルの意味作用は混同されたままだという（Lewis, 1983: 181）。

エンコーディング／ディコーディング論文に対するリュイスの批判は仮借のないものであったが、それらの問題点はあくまでもリュイスの読解を前提として成立する。その読解は、一般的な意味作用／意味付与实践としてのエンコーディングという区別をホールのモデルに導入した上で、支配的な意味を生み出すエリートと支配的意味を再生するテレビという対比を重ね合わせる。そして、透明なコミュニケーションという図式との類似性が指摘される。リュイスの批判を吟味するには、その前提である二つの意味作用の区別が重要な論点となる。その手がかりとなるのが、1989年2月にマサチューセッツ大学で行われたホールのインタビューである（Hall, 1994）。節合理論、優先的読解や優先的意味の概念、ディコーディングにおける折衝の契機の重要性など議論は多岐にわたるが、ここではリュイスとモーリーの提起した問題を検討することにしたい。

6名いるインタビュアーの一人（Sut Jhally）はリュイスによる読解をこう要約している。リュイスの論考では、エンコーディング／ディコーディング・モデルにおいて、政治的、文化的、政治的世界における一般の意味作用／エンコーディング実践に関連する二次的な意味作用の区別が指摘された。しかも、この読解によれば、エンコーディングの過程は、一次的な意味構成過程の一部をなすのではなく、単に、より広大な意味の諸体系を再生する／しないという観点から作用すると看做されている。こう要約した上で、インタビュアーは、ホールに問いを突きつける。この読解にあなたは同意するのか、あるいはこの読解は誤読であるのか、と。これに対して、ホールは、リュイスの読解が的確であるとし、この論文で識別された意味作用には、二つのレベルがあると述べる。あるべき姿より明確になっていないとはいえ、エンコーディング／ディコーディング論文には意味作用に関して二つのレベルがある。第一のレベルでは、文化的／イデオロギー的世界の意味作用の継続的な過程がある。それは終わりなき過程である。第二に、TV番組制作という特定の実践に関してエンコーディング（視聴の場合にはディコーディング）という言葉が用いられる（Hall, 1994: 259）。

この議論は、実は、改訂されたイデオロギー論である。社会には、人々が世界を理解し、世界に意味を付与する手段となる言説がつねに存在する。それはとどまることのない過程であり、意味作用の領域に対応する。これに対して、ホールは、TV番組制作に特有の事柄を語ろうとするのである。それらを適切に規定しないことにおいて、意味作用の二つのレベルの混同があるとホールは認める。しかし、一般的な意味作用、特定の意味付与实践というリュイスの区別に対し、ホールは一般的イデオロギーと特定のイデオロギー的实践という分析的区別を提示し、イデオロギー論の文脈を強調してみせている。

リュイスの提示した別の論点は、伝統的コミュニケーション・モデルとの類似性であったが、その前提には、意味の「産出」(production)／意味の「再生」(reproduction)という区別があった。問題は、ホールにおける“reproduction”概念がリュイスの想定した意味とは一致しないことである。ホールによれば、エンコーディング／ディコーディング過程は、メディア制度による象徴的生産の特定の契機であり、それはより広大なイデオロギー的世界を“reproduces”する。かつての論文でこう考えたとまでは主張しないものの、これは、あの論文から極めて正当になされうる読解だとホールは述べる。エンコーディング／ディコーディング論文には“reproduction”の概念が含まれている。ただし、英語において、“reproduction”概念は、単なる「反復」(repetition)から切り離す事はほとんど不可能である(Hall, 1994: 259-260)。このため、“reproduction”とホールがいうとき、いつもエンコーディングされた支配的イデオロギーがディコーディングされているかのような印象を与えてしまう。

では、ホールは、どのような意味で“reproduction”という言葉を用いたのか。インタビューでは、第一に、エンコーディング／ディコーディング論文がアルチュセル主義的な論文だと述べてられているが、これは考慮すべき背景である。第二に、“reproduction”という言葉は、スクリーン派の映画理論に対する対抗関係から用いられたという事情がある。スクリーン派においては、どの発言も“production”の行為と看做される。これに対して、すでに与えられた意味に基づいている以上、どの発言も“production”ではないとホールは考える。この見解では、新しい発言でさえ、既にそこにあった意味の変更と看做される。さらに、ホールは、「常に既に」という言葉を論じながら、起源的な契機という概念を取り除きたいと述べている(Hall, 1994: 260)。これらの点を考慮すれば、“production”／“reproduction”は、生産／再生産の意味で用いられていると考えられる。

このインタビューで明確になったのは、一般的意味作用／意味付与实践としてのエンコーディングの区別、あるいは、一般的イデオロギー／特定のイデオロギー的实践という区別が補足されうるということである。しかし、両者の関係は、再生ではなく再生産であり、そこには起源を否定する思考が背景にあったと考えられる。

さて、このインタビューでは、モーリーの批判についても論じられていた。第一に、ホールによれば、全体として、「モーリーの仕事は、必ずしもエンコーディング／ディコーディング・モデルではない：自分自身の実践について反省するとき、モーリーは、それを変えている」(Hall, 1994: 255)。このモデルは、特に、長期間の経験的な仕事を評価する基礎となるべく設計されたものではなかった。例えば、ホールの提示したディコーディングの位置は「理念型的あるいは仮説的・演繹的諸位置」であり、経験的な位置でもなければ社会学的意味での集団でもない。還元主義者ではないとはいえ、モーリーはある集団を特定の読解にわりあてるような簡略化した図を作成している。他方、ホールが指摘するのは、ある個人や集団が、ある時には「ヘゲモニックなコード」でディコーディングし、別の瞬間には対抗的コードを用いるという可能性である。第二に、分析の焦点が意図性に陥りがちだという問題がモーリーによって指摘されていた。優先的読解(preferred readings)がプロデューサーの意図(intention)といえるのかという問いに対してホールは、これを「制作者の意志(intention)に還元したくはない」と述べている。BBCのプロデューサーは、制度的な背景に束縛されているのだから<sup>12</sup>。第三に、モーリーおよびリュイスが別の角度から提示した透明なコミュニケーション・モデルとの類似性という問題がある。実際、支配的ヘゲモニックなディコーディングの位置を説明する際、それがホールは「完全に透明なコミュニケーション」の理念型的な事例だと述べていた(Hall, 1980: 136)。しかし、このモデルの背景として、直線的なコミュニケーション・モデルとの対抗関係があったことをホール



は指摘する。仮想敵は、送り手が一元的なメッセージを生み出し、受け手がそれを受信するというモデルである。エンコーディング／デコーディング論文は、コミュニケーションに関する透明性の概念を、ある程度、中断するものでもあったとホールは述べる (Hall, 1994: 254)。メッセージを生産することは必ずしも透明なものではない。メッセージは、意味の複雑な構造であり、単純なものではない。コミュニケーションの連鎖は直線的な仕方では作用するわけではないのである (Hall, 1994: 254)。

このように、事後的なものとはいえ、ホールは、著者としての「意図」を説明し、あの論文が、部分的には、透明なコミュニケーションという発想とは異なる見方を含むと反論する。スラックが指摘するように、エンコーディング／デコーディング論文それ自体、ある緊張を孕んだ両義的なものなのである。透明なコミュニケーションという発想を部分的には有しているが、他方では、そうした発想を突き崩す可能性を秘めてもいるのである。

#### 4. 節合理論による解釈

ホールとのインタビューが行われた同じ年の1989年11月、第7回文化とコミュニケーション国際会議がフィラデルフィアで開催されている。そこでP.ピラーイーはホールのモデルについて報告しており、1992年には、『コミュニケーション理論』誌上に論文を発表する<sup>13</sup>。この論文は、一方で、ホールのモデルが透明なコミュニケーションの観念を温存させていると批判しているが、後にホールが発展させた節合の理論の視点から再読することにより、諸限界を乗り越える可能性をも提示している (Pillai, 1992)。

ピラーイーによれば、第一に、ホールは、エンコーディングにおける優先的意味、デコーディングにおける優先的読解という言葉と、両者の等価性を仮定しながら、互換的に用いている。それらは支配的イデオロギーという言葉と等価なものとされる。したがって、ある場合には、優先的意味、優先的読解、支配的イデオロギーという言葉の等価性が成立することになる。ホールの論文で無視されているのは、これらの等価性が、エンコーディングとデコーディングの実践の効果として達成されるものにはかならないということである。さらに、鍵概念の曖昧な使用法は、透明なコミュニケーションという観念を温存する結果になっている。リュイスの読解を可能にしているのは、“signification”, “production”, “fix”, “prefer”などの術語がこの論文で問題のある仕方で用いられたからだと彼女は分析する。第二の問題は、全体性に関するものである。この論文を書いていた当時、ホールは、拡張されたヴァージョンとはいえ、依然として土台-上部構造図式の内部で作業していたという。実際、経済的な土台による決定の可能性をこのモデルに読みとる研究者も存在する (Pillai, 1992: 222)。

ピラーイーは、コミュニケーションと全体性に関して問題点を指摘する。彼女は、エンコーディング／デコーディング論文において既に現れていたが、十分に発展させられてはいなかった節合の理論に注目し、それによっていくつかの問題点が克服できることを示す。

ピラーイーは、一方で、ホールが透明なコミュニケーションという観念に批判的であったことを認める。エンコーディング／デコーディング論文におけるホールの仮想敵は、TVのメッセージが既に決定された一つの意味を持ち、オーディエンスによって透明に読みとられうるという想定である。これはコミュニケーションを現実の反映とみなすことである。ホールは、いくつかの理由からこの観念から逃れようとする。第一に、反映論の観念は、メッセージの、言説としての決定性を強調しない。第二に、メッセージそれ自体が支配関係をもって構造化されていること概念化を可能にするのは、イデオロギー的記号の多方向のアクセントというヴォローシノフ (バ

フチン)の観念である<sup>14</sup>。

イデオロギー論の文脈では、透明なコミュニケーションの否定は、新しい主張ではない。それは虚偽意識としてのイデオロギー概念と両立する。この概念において、認識は経験と対象の対応であり、誤認は両者の不一致と看做される。さらに、歪曲の源泉である現実的諸条件を改善することによって、虚偽意識を取り去ることができるとされる。もっとも、アルチュセールやグラムシなどの影響によって、ホールは、この古典的イデオロギー概念から移動している (Pillai, 1992: 223)。虚偽意識としてのイデオロギー概念は、社会的全体性の古典的な土台-上部構造モデルの内部で発展したものであり、経済の卓越性という想定を伴っていた。したがって、この古典的イデオロギー概念からの移動は、社会的全体性の経済決定論的モデルから距離をとることもある。

アルチュセール以降、支配関係をもって構造化された複合的な全体という概念が広範にあらわれる。ここでは全体性は諸水準間の関係からなるとされる。それは単一で本質的な一対一の照応に還元されるのではなく、照応と矛盾の関係からなる。これらの水準は、分節化(節合)されるものと考えられるようになった。諸水準のうちの一つであるイデオロギー的なものは、諸水準間の関係が表象され、産出され、再生産されるという点で重要である。この過程は、節合と再節合の過程と考えられるようになった。

グラムシ以降、ヘゲモニーや節合、イデオロギーの概念は、アルチュセールの応用によって、また、それとは独立に影響力をもってきた。グラムシにとってヘゲモニーとは、社会諸集団が従属的な位置に積極的に同意するようにするため、支配的な階級が社会諸集団の利益を節合する過程である<sup>15</sup>。この従属化の乗り物、いわばセメントがイデオロギーである。それは全く異なる要素の節合、すなわち、常識とより一貫した高次な哲学の節合として考えられている。グラムシは、利益や信念や実践の集合から常識を構築する(節合と再節合)闘争としてヘゲモニーを理解する方法を提示した。イデオロギー闘争としてのヘゲモニーの過程は、節合を伴う支配と従属の関係に注意を喚起するために用いられる (Slack, 1996: 117-118)。

現実の反映としてのコミュニケーション概念から移動する際、ホールは言説的なものの規定性を強調する。ただし、彼は、ラクラウのように、全てを言説に還元するのではなく、言説的なものと非言説的なものとの区別を保持する。言説は、言語と現実の社会関係の節合の産物とみなされる。この節合概念は、決定を理解する方法であり、それによって必然的な対応を想定することなく、社会的全体性の二つの要素の関係を思考しうる。

ホールによれば、節合 (articulation) は、全てのケースにおいて法則や事実として必ず存在するものではなく、特定の条件下で成立する接続や連結のことであり、特定の過程によって積極的に維持される必要のある接続や連結を意味する [接続ないし関係づけの創造的過程とする見解もある (Slack, 1996: 114)]。それは「永遠の」ものではなく、たえず回復されるべきものである。特定の状況下では消失するか廃止されるが、それは再建される。古い連結を解消し、新たな接続を生み出すことは再節合と呼ばれる。異なる実践が節合されたとしても、一方が他方へと溶解することはなく、各要素の規定性や成立条件は失われない。しかし、いったん、節合がなされると、二つの実践は「直接的同一性」としてではなく、「統一における区別」としてともに機能する (Hall, 1985: 113-114)。後に、ホールは、比喩を用いて節合を説明している。イギリスにおいて、“articulate”は二重の意味をもつ。一方では、言葉を発するという意味がある。他方、必然的にはではないが、前方部と後方部を相互に連結できるトレーラー=トラックのことを“articulated lorry (truck)”と呼ぶ。二つの部分は、切断されうる特定の連関によって相互に結合されている。したがって、節合とは、一定の諸条件のもとで、二つの異なる要素の統一を作

ることのできる連結の形態である。いわゆる言説の「統一性」とは、異なる別個の要素の節合のことである。所属性をもたないため、それらの要素は異なる仕方でも再節合できる (Hall, 1996: 141)。

節合という言葉の含意を確認してきたが、ピラーイーによれば、節合の理論によって、決定性の問題を社会的諸力や実践の起源ではなく効果の視点から再考することが可能になる。それは、決定性を非還元主義的な仕方でも把握する方法を提供する。重要なのは、部分的であるとはいえ、節合理論が、エンコーディング／デコーディング論文で展開されていたということである。以下では、節合理論の観点からホールのモデルを再考してみよう。

既に述べたように、エンコーディング／デコーディング論文でコミュニケーション過程を概念化した際、ホールは節合の理論を素描していた。「連結されてはいるが、別個の諸契機 — 生産、流通、分配／消費、再生産 — の節合によって生み出され、維持される構造」(Hall, 1980: 128)。各契機 (moment) はコミュニケーションの円環にとって不可欠であるが、最終的に決定的な起源の位置をしめるものはないとされている。「節合における各契機は全体としての円環に必要であるが、いかなる契機も、節合された次の契機を完全に保証することはできない……」(Hall, 1980: 128-129)。各契機は相対的に自律しているものであり、他の契機に決定性を及ぼすとはいえ他の契機を完全に決定することはないのである。

コミュニケーション過程の、このような概念化は、各契機の間には必然的な対応がないという思考と結びついている。「……デコーディングが必然的にエンコーディングから結果として生じるわけではないという議論は、『必然的な対応がない』という議論を強化する」(Hall, 1980: 136)。つまり、支配的、折衝的、対抗的という区別は、エンコーディングとデコーディングの間に必然的な対応がないことを強調するものであったのである。

視聴者が、番組制作の際に用いられたコードによって読解する場合、優先的読解が成立する。ホールは、支配的でヘゲモニックな位置におけるこうした読解を「完全に透明なコミュニケーション」に関連付け、批判を招いた。しかし、節合理論の観点から、三つのデコーディングの位置を再考するなら、テキストを構成する際に用いられたコードと読者にとって利用可能なコード、そしてエンコーダーとデコーダーの構造的な位置の非対称性によって読解が節合されると考えられる。この場合、ホールのモデルはもはや支配的イデオロギー、優先的意味、テキスト読解の等価性を前提にすることはない。そうした等価性は、エンコーディングとデコーディングの実践による節合の効果と看做されるのである。

次に、社会的全体性に関わる問題がある。支配的コードから相対的に自律しているとはいえ、職業的コードは支配的イデオロギーの再生産に寄与するとホールは考えた。リュイスが提起したのは、支配的意味が、作者の社会経済的位置に関連して理解されるべきかという問いであった。節合理論の観点では、支配的意味は、社会経済的な位置によってどのように節合されるかという観点から理解される。節合理論のこうした見方はまた、視聴者のデコーディングが社会経済的位置に規定されるという発想とは異なる仕方でもホールのモデルを再考する手がかりを提供するであろう。

ピラーイーの後、1996年には、節合の理論と方法に関するスラックの論考が刊行されている (Slack, 1996)。彼女は、文化研究の流行および制度化を念頭に置きながら、節合概念の矮小化を警戒し、アルチュセール、グラムシ、ラクラウ、ホールにいたる節合理論の文脈を検討する。その一事例として、エンコーディング／デコーディング・モデルが論じられ、各要素の自己同一性を前提とした本質主義的なモデルとの対比が描き出される。その際、スラックが手がかりとするのは、ラスウェルのモデルである。「誰が、何を、どのような経路によって、誰に対して、

どんな効果を伴って言うのか」(Lasswell, 1960: 117)。スラックの解釈では、ここで、各構成要素は分離可能で本質的な自己同一性をもつものとされ、構成要素にせよ過程にせよ節合と看做されてはいない。また、エンコードされた意味とその意味が生み出す効果との対応関係を保証するメカニズムが背後にある (Slack, 1996: 123-124)。

これに対して、ホールのエンコーディング・デコーディング・モデルは、依然として伝達モデルで作業しているものの、諸過程の様々な構成要素(送り手, 受け手, メッセージ, 意味など)が、本質的な意味や自己同一性を欠いた節合であると看做することにより、固有な自己同一性の肯定に挑戦している。これは、コミュニケーションの過程を対応としてではなく、節合として再考することである。コミュニケーション過程における各構成要素または各契機それ自体が節合であり、相対的に自律した契機であるとするれば、いかなる契機も節合された次の契機を完全に保証することはできない。自律性が相対的なものにすぎないという主張は、ある節合-メッセージの言説形態-がより特権化され権力的な位置から作用するという認識をも可能にする (Slack, 1996: 124)。これは能動的受け手論との相違である。

## 5. おわりに

エンコーディング/デコーディング・モデルに含まれた透明なコミュニケーションという発想に対する批判と節合理論による再解釈を確認してきた。一義的な意味伝達を前提とする透明なコミュニケーションという発想は、ポスト構造主義以後の思考からすればあまりに素朴である。他方、そうした発想を放棄すると、メディアによる操作や支配を語ることは困難になるのではないか。ホールは、このアポリアを越えて行く。果てしなく続く意味生成の過程のなかで一時的に特定の意味をつくりだす作用がイデオロギーである。完全に固定することはできないが、イデオロギーはテキストの意味を固定化する (Hall, 1994: 263-264)。差異の戯れが抹消される地点、その周囲においてテキストが成立する中心があるとすれば、意味が一時的に固定されてゆく過程を分析すること、あるいは読者ないし視聴者とテキストとの折衝の過程を分析するといった課題を考えることもできる。しかし、問題は理論的な問いに限定すべきものではない。

論文集に収録されることで「エンコーディング/デコーディング」が広く読まれうるようになったのは1980年以降のことである。奇しくもそれは1979年にサッチャーが首相に就任した後である。1983年の論文でホールが指摘したのは、リテラシー低下へのパニックや都市にある「暴力的な」学校の恐怖心をあおる話が、教育をめぐる潮流を変えたことである。その際、大衆的メディアによるセンセーショナルな「事例」の報道が、重要な役割を果たしたという (Hall, 1983: 35)。ホールのモデルを彼の仕事全体の中に位置づけながら、現代日本の文脈でどう活かすことができるのか。テレビ番組におけるジャンル混交が進行し、さらには新たな放送形態が出現する現代のメディア状況で、彼のモデルをいかに再考すべきであるのか<sup>16</sup>。残された課題は多い。本稿は、これらの課題にむけて開かれた理論的準備作業である。

## 【註】

- 1 イギリス, アメリカ, 日本以外でもこのモデルは関心をもたれている。フランスでは、既に1990年代半ばにおいて、このモデルに関するホールの論文が翻訳されている。また、フィリップ・ブルトンらが『コミュニケーションの爆発』の第三章前半で紹介している (Breton et Proulx, 2002)。ドイツではハーバーマスが『公共性の構造転換』の「1990年新版への序言」

で言及している。

- 2 この他、ホール自身の論考は含まれていないが、グロスバークとマクロビーによる『保証なしに スチュアート・ホールに敬意を表して』（2000年）なども出版されている。
- 3 2003年にロジックが、2004年にディヴィスとプロクターがホール論を出版している。なお、ディヴィスの著作には、2002年11月にロンドンで行われたホールのインタビューが収録されている。
- 4 研究書や教科書は、ホールの理論的介入の実践的な意義を隠蔽するという批判があるかもしれない。ただし、ディヴィスの著作は、時代のコンテクストを重視しており、初期ホールについての詳細な記述がある（Davis, 2004）。
- 5 1990年代の日本においてホールへの関心は高まったが、モーリーによる、エンコーディング／ディコーディング・モデルの批判的考察は十分に注目されなかったように思われる。
- 6 この省察がインタビュー形式でなされたことは興味深い。読みに関するホールの論文について、専門的な「読者」の提示した問いが著者自身に突きつけられ、対話がなされたことになる。
- 7 エンコーディング／ディコーディング論文でホールは、意味作用に還元できないイメージの次元についてあまり自覚的ではないように思われる。イコニック記号には言及する一方、指標的記号には言及しないことも注目される。
- 8 支配的な定義は、出来事を、巨大な全体化や大きな世界観に連結する。それは、省略や逆転、神秘化による連結であっても、出来事を、国家的な利益や地政学的なレベルなど全体化された見方に結びつける。
- 9 提示された番組の概要は以下の通りである。プログラムA（ネーションワイド 1976/5/19）では出来事（自分を襲ったライオンを再訪する女性）、パロディ、あやしげなもの（がらくたから何かを作る学生の試み）、社会的に有用なもの（目の不自由な人が三次元の絵を描けるようになる発明）などが含まれている。次にプログラムB（ネーションワイド 1977/3/29）では、ネーションワイドには珍しく、予算案によって生じた政治的・経済的な問題を扱った映像である。プログラムの主要部分の内容は、予算案が三つの典型的な家庭にどのような影響を与えるのかについてのものである。
- 10 第一のプログラムは、様々な教育歴や文化的・社会的背景から選ばれた18のグループに提示される。ある者はロンドンに、またある者はミッドランドに住んでいる。これらの者には学校の生徒、様々なレベルの継続教育（中等学校終了後の教育）や高等教育の学生（定時制／全日制）が含まれている。第二のプログラムは11のグループに提示される。グループのある者は様々な教育歴をもち、他の者は、主にロンドンにある（職種別）労働組合や経営訓練センターの者などである。継続教育（中等教育以後のもので、大学は含まない）や高等教育における学生（定時制／全日制）を含み、またフルタイム、パートタイムの労働組合員や銀行幹部を含む。
- 11 モーリーは、虚構的テキストには適用しにくいとしているが、別の見解も存在する。
- 12 この見解は別の問題へと通じている。ホールは、自らのモデルが、イデオロギー的な側面において、メディア制度をやや同質的に見せてしまうが、チャンネル4はそうではないと指摘している。それらは少数派の番組や対抗的な番組のみならず、マイノリティの声に捧げられているというのである。
- 13 プラーイーの論考は、ホールのインタビューの刊行以前に発表されている。しかし、彼女の論文にはリュイスへの謝辞が記されていることから、ホールのインタビューについて、事前に聴いていた可能性もある。
- 14 同一言語を様々な階級が用いることで、各イデオロギー記号のなかで多方向のアクセントが

- 交差する。支配階級は、イデオロギー的記号に、超階級的な永遠の性格をそえ、単一アクセントのものにしようとする。他方、時には、罵詈が賞賛の言葉となり、真理が嘘言と思われるように、言葉はヤヌス的な矛盾を孕んでおり、社会的危機の時代にそれが露呈する。
- 15 「ヘゲモニー」は、もともと、1926年の南部問題に関する論文で用いられた概念であり、労働者の指導権として提示されたが（グラムシ、1962）、その後、語義が拡大された。なお、ここでの説明は後者についてのものである。
- 16 2006年の終戦記念日に小泉首相は靖国神社に参拝したが、そのニュース映像がアメリカの動画共有サイトに投稿されている。その映像を見た者が感想を記述し（コメントに関するコメントが書かれる場合もある）、それがウェブサイト上で即時に公開される — 送り手／受け手の境界、さらには国家と国家の境界を越えている — といった事態を、理論的にどのように位置づけることができるのか。

### 【引用・参考文献リスト】

- Ang, I. (1990) "Culture and communication: Towards an ethnographic critique of media consumption in the transnational media system", in *European Journal of Communication* Vol.5 (2-3) pp.239-260.
- Billig, M. (1997) "From code to utterances: Cultural Studies, Discourse and Psychology", in Ferguson, M. & Golding P. (eds), *Cultural Studies in Question*, Sage, pp.205-226.
- Breton, P. et Proulx S. (2002) *L'explosion de la communication*, La Découverte.
- Curran, J. (1990) The "new revisionism" in mass communications research", in *European Journal of Communication* 5(2-3) pp.135-164.
- Davis, H. (2004) *Understanding Stuart Hall*.
- グラムシ, A. (1962) 「南部問題にかんするいくつかの主題」, 山崎功監修『グラムシ選集』合同出版。
- Hall, S. (1958) "A sense of classlessness" in *Universities and Left Review* vol.5, pp.26-32.
- \_\_\_ (1978) "The hinterland of science: ideology and the 'Sociology of knowledge'", in McLennan, G. et al. (eds), *On Ideology*, London: Hutchinson, pp.9-32.
- \_\_\_ (1980) "Encoding /decoding", in Hall S. et al., (eds), *Culture, Media, Language*, Routledge, pp.128-138.
- \_\_\_ (1982) "The rediscovery of 'ideology' : Return of the repressed in media studies", in Gurevitch, M., Bennet, T. et al. *Culture, Society and the Media*. Methuen, pp.56-90.
- \_\_\_ (1983) "Great moving right show" in Hall, S. and Jacques, M., *The Politics of Thatcherism*, Lawrence and Wishart, pp.19-39.
- \_\_\_ (1985) "Signification, representation, ideology: Althusser and the post-structuralist debates" in *Critical Studies in Mass Communication*, 2(2), pp.91-114.
- \_\_\_ (1986) "Cultural studies: Two paradigms", in *Media Culture & Society*, SAGE.
- \_\_\_ (1992) "Cultural studies and its theoretical legacies", in Grossberg, L., Nelson C., Treichler P. (eds), *Cultural Studies*, Routledge, pp.277-294.
- \_\_\_ (1994) "Reflections upon the encoding / decoding model: An interview with Stuart Hall", in Cruz J. and Lewis J. (eds), *Viewing, Reading, Listening: Audiences and Cultural Reception*, Westview press, pp.253-274.

- \_\_\_\_\_(1996) "On postmodernism and articulation: An interview with Stuart Hall" in Morley D. and Chen K. pp.131-150.
- \_\_\_\_\_(1997) "The work of representation", in Hall S. (ed.), *Representation: Cultural Representations and Signifying Practices*, Sage, pp.13-74.
- Hall, S., Connell I. and Curti L. (1981) "The 'unity' of current affairs television", in Bennett, T. et al. (eds), *Popular Television and Film*, pp.88-117.
- Laclau, E. (1988) "Metaphor and social antagonisms" in Nelson C. and Grossberg L. (eds), *Marxism and the Interpretation of Culture*, pp.249-257.
- Lasswell, H. D. (1960) "The structure and function of communication in society", in Schramm, W., *Communications*, University of Illinois press, pp.117-130.
- Lewis, J.W. (1983) "The encoding / decoding model: Criticisms and redevelopments for research on decoding", *Media, Culture, and Society*, pp.179-197.
- Morley, D. (1980) "Texts, readers, subjects", in Hall, S., Hobson, D., et al. (eds), *Culture, Media, Language: Working Papers in Cultural Studies 1972-79*, London: Hutchinson, pp.163-173.
- \_\_\_\_\_(1992) *Television, Audiences & Cultural Studies*, Routledge.
- \_\_\_\_\_(1994) "Active audience theory: Pendulums and pitfalls", in Levy M. R. and Gurevitch M. (eds), *Defining Media Studies: Reflections on the Future of the Field*, Oxford University Press, pp.255-261.
- Morley, D. and Chen, K.-H. (eds) (1996) *Stuart Hall: Critical Dialogues in Cultural Studies*, Routledge.
- Pillai, P. (1992) "Rereading Stuart Hall's encoding / decoding model", *Communication Theory* 2 (3), pp. 221-233.
- Slack, J.D. (1996) "The theory and method of articulation in cultural studies", in Morley D. and Chen K. pp.112-127.